

*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton*  
George Eliot の小説における gossip,  
rumor の働きについて(1)

嶋田 貴美子

(1) はじめに

当学紀要24号に発表した *Middlemarch* に関する論文の中において、筆者は商業都市 Middlemarch に住む人々の中に潜んで、その発露を虎視眈眈と伺っているかにみえる gossip, rumor の力が、ターゲットとして中でも特に Bulstrode や Lydgate という獲物を獲得するや、彼らを追いつめ、とうとう Middlemarch から彼らを追放することに成功するという、その恐るべき脅威について考察した。George Eliot の小説においてはこのように、小説の background をなす時代あるいは地域社会が有する特有の gossip, rumor の力が、多かれ少なかれ登場人物の各々に作用し、その地域社会における彼らの存在を脅かすばかりか、場合によっては彼らを破滅に導くことにもなりかねないというような、いわゆる community と個人との激しい確執が、常に大きな構成要素を成しているのである。

それは George Eliot が人間の持つ不完全性を愛し、弱く哀しい不完全な個人がつい陥ってしまい、しかし結果として彼らの人生にもはや取り返しのつかない汚点を残してしまう行為に対して、読者の中に大いなる sympathy を喚起させようと試みるからなのである。そして George Eliot はそういった弱い人間が犯してしまった誤ちの法的な制裁以外の裁き手として、従来の文学者たちが用いたような絶対神やそれぞれの人の中に内在する良心というような類のものを設定するのではなくて、その時代時代、あるいは地域地域の community の因襲に根ざした流動的な code を設定し、その code が具体的には、その community 独特の rumor, gossip, scandal などの evil speaking となって誤ちを犯してしまった者を弾劾するのである。人生を全うする上で過去・現在・未来の一貫性が何より大切であるとする George Eliot にとって、誤ちのために生活の根を下している community から締め出されることは何よりの悲しみと言わざるを得ない処罰であった。ましてやその community の code を規定している因襲が旧弊に侵されているものであればあるほど、<sup>(2)</sup> 偏見がはばをきかせ善悪の観念はあいまいでありそれによって裁かれる者の悲哀は深まるのである。そうして George Eliot は、旧弊でありながら未だなお強い力を有する community の code に悔しくも敗退せざるをえない人たちの悲劇的人生をクローズアップし、読者の中に彼らへの sympathy を呼び覚まそうとするのである。彼女の小説の中でもその特色が最も強く現れているものとして挙げられるものには *The Sad Fortunes of The Reverend Amos Barton*, *Mill on the Floss* それに *Middlemarch* の三つがあ

るが、当論文では主として George Eliot の小説執筆のまず第一作目である *The Sad Fortunes of The Reverend Amos Barton* の中における gossip, rumor, scandal などの働きについて考察していきたいと思う。

## (2)

George Eliot が36歳になって初めて *The Sad Fortunes of The Reverend Amos Barton* を書き始め、他の中編 *Mr. Gilfil's love-story* と *Janet's Repentance* とを合わせて *Scenes of Clerical life* (1856) として出版するや、1859年2月に *Adam Bede*, 1860年に *Mill on the Floss*, 1861年に *Silas Marner*, 1863年に *Romola*, 1866年に *Felix Holt, the Radical*, 1871年から72年にかけて超大作である *Middlemarch* を、1876年には *Daniel Deronda* と、次々に英文学史上の金字塔ともなる名作を発表していったのは、若い頃の George Eliot と親交のあった Herbert Spencer が自叙伝の中で述べているとおり、以前から周囲の知識人に容認されていたにもかかわらず、彼女の内気な性格によって阻止されていた小説家としての資質が、彼女の同棲相手であった George Henry Lewes の励ましを得て開花したからであるというのは衆知のとおりであるが、それとともにその根源には幼少の頃から敏感に感じていた自己と自己が生きられている外界、つまり community との関係、さらに言いかえればその community の中にわき上がる gossip, rumor, scandal と自己との関係について、36歳という年齢に到って初めて彼女の中で一応の解答が得られたという確信があったからなのではなかろうか。それはもちろんその36年の間に彼女が成した行為が引き起こした自己と他者とのあまたの確執の中から得られた結論でもあろう。

彼女の伝記にさっと目を通すだけでも明らかなように、その確信に到るプロセスには、3つの大きな節目を見出すことができる。つまりまず最初のもは、彼女の少女時代の半自伝的小説であるといわれる *Mill on the Floss* の主人公 Maggie に具現されているように、多感ですぐれた頭脳の持ち主であったが故に、扱いにくい気質の少女であった頃の彼女の、家庭内における、あるいは親族の者たちの中における極めて異端的な立場であり、第2は、母親が亡くなり兄弟達全員が結婚して父の Robert との二人暮らしになって間もなく、厳格なクリスチャンであった父に対して、神への懐疑に陥った Mary Ann が家庭内に起した Holy War と言われるものであり、そして第3は、何といても合法的な結婚を諦め、Lewes の愛人としての立場に一生甘んじて生きることを選んだその選択であった。

これらが彼女に対して引き起こした evil speaking, つまり gossip, rumor それから scandalous であるとの非難に対して、口では簡単に弁明することのできない自分の深層領域の interpretation を行ないたいと思う強い気持ちが、彼女が本来的に持っている天才的な文学的資質と相まって、上記に見るような、彼女の小説執筆の推進力に拍車をかけたものと思われる。

当論文では、community と個人との確執、つまり community の代弁である gossip, rumor などの evil speaking に悩み苦しむ Amos Barton 牧師の悲哀が綴られている彼女の最初の小

説, *The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* をどうしても書かねばならない心境に到ったその動機を探るため, 比較的客観的な事実に基づいて George Eliot の人間像に迫っている Ina Taylor による彼女の伝記と, 彼女の心の軌跡を刻明にたどっている Bordenheimer による彼女の伝記に主に依拠しながら, 他の文献からの情報も交えて, あまたの gossip や rumor などの evil speaking を引き起こした彼女の行為, あるいは scandal が実際にはどのようなものであったか少し長い探索を試みるつもりである。それから *The Sad Fortunes* の中では community の code の具象である evil speaking がどのような形で昇華され, *Mill on the Floss* においてはその取り扱い方がどのように変化し, 更に George Eliot 自身の中でその執筆時までにはそういった community の evil speaking に対する概念が完成されていたといわれる *Middlemarch* における, その完成された概念とはどのようなものであるかを糾明していきたい。

当紀要25号においては, 紙面の都合上, 彼女の人生において直接, いわゆる evil speaking を彼女の生きている community の中に引き起こした Holy War と言われる事件の内情と, その後の数多くの恋愛の遍歴を経てから最終的に George Hery Lewes と同棲するに到ったその人生の選択までの彼女の立場の全容に迫ることで終始してしまうかもしれないことをまずことわっておかねばならない。なお, George Eliot の名前の表記法については, 彼女自身がそう名乗っていたとおり, 25~26歳までについては Mary Ann とし, それから36歳まで, つまり *The Sad Fortunes* を George Eliot 作として出版した年齢までについては Marian とし, それ以降は George Eliot として表記する。

(3)

Mary Ann は少女の頃から並はずれて聡明な少女であり, 読書量の増加と共に人間を洞察する力や内省する力が増大し, 彼女の書簡から明らかのように彼女は14歳にして人間の行動様式の中にある真実と虚偽, つまり人の心に内在するものと外的な影響によって身についたものとを分類し, 幸福というものについての一応の概念を持って世間には是とされていることから脱却した独自の基準を求めようとしていたのであった。17歳にしてすでにフランス語, ギリシャ語, ラテン語のみならずイタリア語, ドイツ語を自由に駆使できる抜群の語学的力を備えて世の中の真実を追及する志向をますます深めていくのである。

折も折, イギリス国内においては産業革命による混乱が一応治まり, フランス革命からも半世紀ほどがたち, 1800年初頭にナポレオン戦争も終結してヨーロッパ社会は新しい時代の活力があふれ, 特に思想界においてはそれが顕著であった。Goethe (1749—1832), Owen (1771—1858), Comte (1798—1857), Feuerbach (1804—1872), Darwin (1809—1882), Marx (1813—1883), Spencer (1820—1903) などなどの著名な文学者や思想家たちがこの時期に排出されているが, Mary Ann もまた22歳の時に Charles Bray という, そういった進新の思想家の一人を知り, 彼のサークルに加わるや徐々に当時の名だたる進歩的な思想家たちと親交を深めていくようになるのである。

Mary Ann は上に記したような抜群の語学力を備えていたばかりではなく、数学、天文学、地質学、昆虫学、骨相学などにも造詣が深く、しっかりした自分なりの宗教感や哲学に基づく「陰影に富んだ才能」を持っていながらも、「激論になっても控え目な態度を失わない」その人柄は、当時の一流の思想家仲間からも好感を抱かれたのである。<sup>(16)</sup>

しかし Evans 家における彼女の立場は子供の頃から微妙であり、*Mill on the Floss* の中の主人公 Maggie がいとこの Lucy と比べて外見的に、あるいは女の子としての礼儀作法の上でことごとく見劣りしたのと同様に、彼女は姉の Chrissey とは全く見劣りしていて、母親や家によく出入りしていたおば達の愛を得ることができない寂しいものであった。しかしそういう彼女に常に味方し、彼女の聡明さを早くから認め、彼女の知的欲求を存分に満たすよう援助を惜しまなかったのが父の Robert だったのである。自分の身内でただ一人彼女を理解しこよなく愛してくれた父に対する Mary Ann の敬愛は深く、五人もいた兄姉たちがすべて結婚し、父と二人だけの暮らしになっても Mary Ann の心には父と共にいる安らぎの中に寂しさを全く感じることはなかったのである。しかしながらそうした愛に満たされた平和な日々は、Mary Ann が 22歳の1841年の3月、結婚した兄の Issac が父の家督を継いだのに伴ない、生家を兄に譲り、父と二人で Coventry の近くの Foleshill の家に引越した折に、隣家となった Pears 家の夫人が *The Philosophy of Necessity* (1841年) を発表した Charles Bray (1881~84) の姉であり、彼女を通じて Bray が主催する思想的サークルのメンバーになったことからろくも崩れていくことになる。

Charles Bray は Methodist <sup>(17)</sup> として育てられたが、17歳の時に Evangelical Dissenter <sup>(18)</sup> の知人により改宗させられて、これが契機で宗教問題を真剣に考えるようになり、宗教の本を読みあさったのであったが、信仰への懐疑はますます募るばかりでひどく健康を損ねて深刻な絶望感に陥ったいわば魂の暗黒時代を経て生涯不動の信条を確立した人である。彼は急進主義的な博愛主義者で、万人のための非宗教的教育、選挙権の拡大、労働組合および協同組合を組織する労働者の権利、精神障害者の人道的待遇などを標榜した。彼の思想はその著書、*The Philosophy of Necessity; or the Law of Consequences as Applicable to Mental, Moral, and Social Science* の中で明らかにしているように、人間の精神は物理的な諸現象と同様に一定不変の法則によって支配されているとするものであって、その彼の主張は、いわゆる合理主義的な決定論であった。

Mary Ann は Pears 夫人の家で実際にこの Charles Bray や Bray の妻 Cara、それから Cara の兄で *An Inquiry into the Origins of Christianity* (1841年9月) を発表した Charles Hennel、そして Hennel の妹 Sara などと会い交友を深めていったのであったが、「常に自分の好きな人の思想から強い影響を受けやすい性格」<sup>(19)</sup> であった Mary Ann が Charles Bray から受けた影響は強く、彼らが出会ってまだ一年にも満たない1841年の終わりまでに彼女はもはや free-thinker、つまり Victorian Term では agnostic (不可知論者：究極的な真理や神などの感覚的に経験する以上の実在を、人間は知ることができないとする立場をとる者) となって、神の存在に疑問を抱くようになっていたのである。そして Mary Ann は、神の絶対性を信じて疑

わなない家族や親叔等に対して、自ら Holy War (聖戦) を起したのである。

(4)

Holy War, つまり神への懐疑のために家族、特に最愛の父との間に生じさせてしまった宗教的な不和は、敬虔なクリスチャンを任じる平和な中産階級の Evans 家に Mary Ann が起した大騒動であった。それは彼女が22歳の年の1842年1月2日、それまで欠かさず行っていた教会への父の随行を彼女が拒否したことから始まったものである。1月2日というこの日付から考えると、New Year's Resolution として彼女は、自分の心の奥底でしばらく前から進展させてきた信念をそのような形で公表したものと解釈され、それはいわばひとりよがりの衝動的な決意による行動であったと思われる。それにしてもその突然の行為は、彼女の inner life と家族の生活との間にあるずれの大きさと、そのような問題をうまく切りぬけていくことができない彼女の、半ば捨てばちな極めてぶざまな対し方を垣間見せるものとなったのであった。

それはまた彼女にずっとつきまどっていた父の Robert と、幼い頃からの彼女の師であった Maria とに対するある意味での挑戦でもあり、彼らから独立することへの Mary Ann の願望でもあったのである。つまり Mary Ann と父の Robert は二人とも宗教的なしきたりの遵守という外面性と、独自の綿密な宗教が存在する内面生活を長い間共に共有してきたのであるが、Mary Ann はここにきて敬虔な物を容認する力と、彼女自身が負っている父親に対する義務感や気持のつながりを宗教教義から分離させようとしたのであり、父の Robert と師である Maria にも、彼女との関係においてそういった同様の分離をするように求めたのであった。

父 Robert は Gliff に引越してまもなく Bray のサークルに加わった娘の心に大きな変化が生じていることは知っていたが、老いた父にとっては、娘が教会への随行を拒否するという思ってもみなかった不孝な行為を行なったことは大きな傷手であったばかりか、許しがたいものであったに違いない。Mary Ann のそういった異端的な態度や考え方は、父に対しては結果的に社会的な恥辱を招くものであり、娘のために Gliff という新しい community に加入したのに事もあろうに当の娘によってそこにおける彼の社会的な立場をなくす脅威にさらされたのである。そういう父親の思いとは裏腹に、Bray のサークルにおいて一流の思想家達と知り合い、共に仕事をするようになればなるほどそのサークルを横溢していた不可知論的な考え方はますます彼女の中に浸透していき、それは彼女に特定の宗教から離脱することだけではなく、信仰そのものを捨てるようにと駆り立てるものとなっていったのである。

教会に行くことを拒否し出してから2ヶ月余り、父と同じ家に住み、同じ馬車に乗って親叔を訪問するのは前と変りはなかったが、Mary Ann は自分の立場をどうしても理解してもらえず、また自分の立場について議論することもできなくて絶望のあまり過激な言葉を連ねた手紙を父親宛に出したりする。以前は深い愛で結ばれていた父と娘との距離はそのようにしてますます離れて行ったのである。父 Robert は、自らの切なる望みに依然石のように沈黙を続け不服従を頑なに貫こうとしている娘を断乎家から追い出そうと決意を固めて、思い切って家を売りに出し Mary Ann との決別を計る。生活の援助も断たれて、しかたなく Mary Ann は教師

として自活したのであったが、そのような苦難を与えられたとしてももはや Bray の考えに心酔し、「キリストは使徒たちの想像の中で復活したに過ぎない」「キリストの重要性は、彼が非凡な勇気と洞察力の持ち主だったことにある」「キリストを神の子とする使徒たちの信仰は、それ以前にはなかった高貴な道德のヴィジョンを生むことになった」と論じた Charles Hennel の説にも感化され、神の存在を絶対的な仮説として受け入れなくなっていた思想界に没入してしまっている Mary Ann の考えは、そうたやすく変えられるものではない。しかし Holy War の期間でも Mary Ann にとって最悪の事態をもたらすかみえた自活の日々は結局ほんの短い間に終結することになる。兄の Issac とその婦人の尽力により、やがて父と娘の間には休戦が成立して、二人が連れ立って教会に行く姿が再び見られるようになったのであった。一見それは父と娘が一たん失った信頼関係を再び取り戻したかみえたが、二人のそうした行為はやはりあくまで表向きだけのものであり父と娘の間の壁が完全に取り除かれたのではなくして、実際は Robert の方が折れて Mary Ann が自由に好きなように物を考える権利を暗黙のうち Robert が認めたことによって、初めて到達しえた和解だったのである。

Holy War は Mary Ann が父親に対して無意識のうちに行なった挑戦的行為であったのであり、またその休戦は娘の運命を我が意で導こうとする厳格な父親の権威の失墜を意味するものでもあったといえるであろう。そしてそれはまた Mary Ann が深く愛している一方で心の中に無意識のうちに抱いていた父 Robert と兄 Issac に対する敵がい心 (hostile aggressiveness) でもあったのである。その一面で Mary Ann は彼らを深く愛する気持ちに変わりはなく、その愛する父と兄に錯そうした自分の宗教観を完全に interpretation できずに自分自身を十分に理解してもらえなかったという寂しさがあったのであった。また彼女の内面的変化から考えると、この Holy War は彼女の宗教観が evangelical からロマンチックな彼女の想像の極地へと移行したことの現われでもあったのである。Mary Ann の信仰心の動揺は、神とは何かという問から発したものであり、彼女はそれを Creator, Supreme Being あるいは One Father などとよんだが、具体的には形象 (figure) としての神の概念を否定し、それは、その背後にある文化の中に包含されている一つの奉納物としての祈とう者であるとしている。つまり彼女の思想の焦点は、神格 (Deity) の問題そのものに当てられていたのではなく、神という概念にとらわれないロマンチックな情緒や知性の自由な解放に向けられていたのであった。

## (5)

Mary Ann は Pears 夫人に宛てた手紙の中で「私としましては『真実の聖なる墓』(Truth's Holy Sepulchre) を横領された支配から解放しようとして行動する、そういった栄ある聖戦の戦士たちの中には是非加わりたいと思っているのです。そうすれば自ずとその復活が見えてくるものと思われるのです」と書いている。つまり彼女にとっての Holy War は人間が作った教義によって明確化された神 (God) というものの探求の表明であり、その中における彼女の態度は、父の Robert を初め家族内に強く根ざしていた宗教から必然的に派生して来ざるを得ない、それまで彼女を支え育んできたものの一切を捨て去るべきものであったが、それに対して彼女

は全く悩み苦しむこともなく、また対外的にも何の悪びれたところも見せずに、周囲の者にとっては異端である新しい宗教観を持つことに対しゆるぎない自信に満ちて、自分自身を丸ごと容認し、祝福された僧侶のように、あるいはまた、世論に対する宗教上の殉難者として自分自身を見なし、自分が劇的に打ち捨てた福音主義を唱える人々の皆からも共感と賞讃とを得ようとしたのであった。Maria に宛てた手紙の中でも、Mary Ann は、Maria がていねいに開拓した福音主義の庭園を何のちゅうちょもなくふみつけにしたにもかかわらず、彼女との関係に何ら変化は起っていないというそぶりを見せ、その友人の変わらぬ愛情にすがりたいと思う気持を明白にしたのである。

つまり彼女の意識の根底には、自分が起した Holy War とは、一般社会に対する知性の殉難であり宗教観は愛とは分離されるべきであるとする身勝手な考え方があったのである。父 Robert に対する手紙の中でも、彼女は父と娘との間にある愛や義務と、Robert が宗教的に離反した娘とどのように共存していくかということに対する世間の目、つまり、彼女の信念と父と娘との間にある道徳的な関係とに対する世間の疑問とを分離させようと努めたのである。つまり自分の中においてはそれまでと何ら変ることのない父への愛と義務、それから新たに生まれた父と同調することのできない信念との、二つの絶対的な存在が彼女の心に君臨し、彼女のたずなをひいていたのである。そしてその心理的状况の下でもなお彼女の家族の中におけるそれまでと変ることのない自分の居場所を必要とする気持は、自分の知的確信と同等に強いものであることを彼女は主張した。しかしこれは言いかえれば、彼女は父 Robert のために彼女の人生を犠牲にすることを用意していたと同時に、また自分自身を神の真実を追及していくことに殉じさせようとしていることを表明するものでもあったのである。つまりこのことは、彼女が神の真実への道を発見し、それを明らかにし解釈するというかぐわしい独自の権利を要求すると同時に、その上また自分のやり方で自分の言葉で父親に仕えて、父が社会的な存在であるというより完容な権威を持った実在であるとする確信にのっとった娘としての自己の権利とを要求するものでもあったのである。そのような彼女の身勝手な考え方から生じた、世間的な関心事 (worldly interests) やまた周囲の者たちの考え方に対する軽蔑的な視方は、しかしながら鋭く糾弾されることになる。しかし彼女は自分のプライドを保持しながらそれに対処するために世論に反論することもなく、人々が考えたいようにさせておくという、ただ世間の人々の evil speaking を黙認する姿勢を身につけるようになったのであった。つまり彼女は教会への父への随行を復活させ、表面的には世論に屈従した形とはなったが、内面的には世論に煩わされることのない独自の思想をあくまでも固持していたのである。

Holy War によって Mary Ann は家族関係を維持していくために要求された Sympathy と sacrifice との二つの概念に過敏になり、それらは後の George Eliot の小説の中において人間の持つ性格の中でも崇高さを表わす価値ある本質として大きく開花することになる。つまり George Eliot が小説の中で述べる哲学の中心になるものは widening sympathy であって、これは狭量な心 (narrow-minded) の転向ではなくて、彼女がよぶところの代々の偏見からもはや解放されている人々の意識の中に起こる変容なのであった。George Eliot がいつも言っていた

「広く理想に燃える心はそれを取り巻く御しにくい偏見と対立をもたらすことになり、そして一般的な人間性という名の下にある狭い領域に屈服することに heroism を見出すのである。社会の変革は個々人の意識の内的拡大を通してのみ起りうる過程として行なわれる」という theory <sup>(23)</sup>こそ彼女が起したこの Holy War から生み出された結論であった。George Eliot の小説はその theory にのっとり、その地域の人々の opinions や、ぶざまに盲目的な独善、自己満足のみ偏見、あるいはそこここにたたえられている人々の悪意を皮肉を交えて克明にあばきながら風刺し、それら世間の声の執念深い力によびかけることもせずそれを否定するのでもなくて、同情や情緒を要求するというゆかしい行為の中で、彼女はその風刺を解くのである。

このように Mary Ann が起した Holy War は、常に彼女と共にあって思想を共有していた家族や周囲の者たちからの独立、つまり少女から大人への必然的な脱皮の契機としてとらえることもできるのであるが、対社会的には、常にそのように簡単にすますことのできない大きな問題を含んでいたのである。次の章で述べるように、当時盛に台頭してきた進歩的な思想家の間における限りでは神についての論議は盛ではあったものの、神あるいは宗教などはまだまだ一般の地域社会の人々にとっては絶対的な権限として拠って立つところの思想、信条なのであり、その中でこそ人々の平安は得られたのである。Mary Ann が Holy War によって、そのようにゆるぎない生活の基盤として神を位置付けている中流階級の家族や親叔の中にとつぜんその平安を完全に覆えず思考様式を提示したことは、まさに悪魔的行為と認められるべきものであって、孤軍奮戦を余儀なくされたのは当然のことである。しかしその戦いの場が家族とかごく近い身内の者たちの中に限定されたものであって、決してと切れることのない過去、現在、未来の一貫性を信じる22歳の若者であった Mary Ann が家族親叔の絆を断ち切ることができない以上、Holy War の終結は、Mary Ann の内面における sympathy と sacrifice という二つの崇高な心の営みに頼らざるを得なかったのである。彼女が家族や親叔達の中でいわば針のむしろに置かれながらもそのつらい自分の立場ですら必しに守り通そうとし、父親への sympathy と sacrifice の概念とを獲得したのは、子供の頃よりその22歳までの間、彼女の唯一の絶対的な理解者であった父 Robert への感謝に基づく限りない愛情と、そういった立場にある娘としての義務の心が、Holy War を通じてより明確化したからなのである。父 Robert との間には完全な和解は成らなかったが、Marian の側からの彼との和解は、それから7年後、不治の病に襲われた父に対して、そういう父をたった一人で看病しなければならない自分の不運や、その看護に積極的にかかわろうとしない他の兄姉たちへの不満をもらしながらも12ヶ月余りにも及ぶ長きにわたって献身的に尽くすことによりやっと達成されたのであった。その時すでに29歳になっていた Marian はもはや Bray のサークルの中においては押しも押されぬ一級の知識人として実質的な成果をあげており、更なる上昇気流にのりかけていた折のことで、自分のその知的渴望を父の看護という不毛な仕事に埋没させなければならない立場に立ち、病に苦しむ父への sympathy の陰に厳然としてある sacrifice の概念は、時には堪えがたいものとなって彼女を圧したのである。そういう閉塞的狀態から彼女自身を救い出すために行きついた思考様式が heroism <sup>(24)</sup>であり、また自分の行動様式における愛と義務と、そして自由な思考パターンを



持つこととの分離であった。

それらは Holy War が激化していた最中においても、周囲の者たちから彼女に向けられた evil speaking, つまり gossip や rumor のたぐいに対する盾として彼女を守ったものであった。でもそれらはあくまでも他の者の十分な理解を得られないひとりよがりの解決策であり、敬虔な evangelical であると信じていたのに Mary Ann によって起された Holy War に苦しむ Evans 家を見る地域社会の目は厳しく、彼女は容易には打破することのできない、地域を覆っている古い因襲の前における個人の無力も強く実感したのである。神への懐疑から真実の神の追及は、Mary Ann にとっては生涯において最初に探し当てた、自分の精神を昂揚させないではおかないすばらしい学問的テーマであるにもかかわらず、絶対的な神を信じ日々の生活を始め自分の存在の一切をそこに依拠させていた彼女の家族も含めた当時の人々にとっては、それは眉をひそめ口にのぼらせるのさえ恐ろしい不敬な思考であり、Mary Ann は明らかに時のあるいはまた地域の異端者であり、重大な精神的犯罪者とみなされるべき存在であったのである。そういう彼らに対して彼女が自己の正当性を語りそして理解を求めることは不可能なことであった。そこに生じた彼女の内面に対する周囲の者たちの misread や misinterpretation に対するやりきれなさは、Holy War から十年余り後に生じた George Henry Lewes とのできごとを通じて更に増大され Mary Ann の生涯を通じて心に大きなしこりとなって残ったのである。

(6)

多くの者が中年以降の George Eliot の容姿に風格のある魅力を感じるようになったとしても、それ以前の彼女は顔と鼻が大きくて背も低い、美しさを誇ることは決してできない女性であった。しかし、Herbert Spencer が『抽象的思考の能力が具体表現の能力と共存することは男子においてすらまれで、彼女に見られるこの二つの能力の兼備は、恐らく他に比類がないであろう』と彼女を評しているように、彼女には当代の女性随一の知性が備わっていた<sup>(25)</sup>にもかかわらず、当紀要(2)の中でも述べたとおり、「激論になっても控え目な態度を失なわない」人柄である Marian は同じ思想家仲間から大変好感を持たれ、たちまち注目を集める存在になっていくのである。その上生涯を通じて「いつも一人の男性の強い影響下にあり」Charles Bray が彼の *Autobiography* の中で述べているように「ひじょうに愛情の深い性格で常に誰か頼れる人を必要とし」「従来その感情の豊かさで知られる女性よりも強者として知られる男の方をむしろ好」み「決して一人立ちできる女性ではなかった」彼女は、相手に妻子があるないにかかわらず Charles Bray に始まり Robert Brabant 博士、出版業者の John Chapman, そして Herbert Spencer などに知性の、そして愛情の伴侶を求めたのであった。この中で Spencer だけは独身であったが、Charles Bray は Mary Ann が Bray のサークルに入って以来生涯を通じて彼女が大切に思っていた二人の親友である姉妹のうちの一人である Cara の夫であり、またそのもう一人の親友である Sara の義兄に当たっている。また医者 Brabant 博士は Hennel の *An Inquiry into the Origins of Christianity* に共鳴して Bray, Hennel を長とするそのサークルに仲間入りしたのであったが、当時 Mary Ann は24歳で、博士はもはや63歳の老人で

あった。博士は実直な学究の徒であり、日頃から超自然現象に興味を抱き、友人の Strauss がキリスト教の教会的研究の視点から「福音書のイエスは、キリスト教団の象徴詩に過ぎないと主張したためにヘーゲル学派を二分することになった問題の書である *Das Leben Jesue*」の翻訳の完成を Mary Ann に依頼した人である。彼女の博士に対する思いの真相がどのようなものであったかということは別に、彼は彼女にギリシャ語を教えてくれた師であって、博士は彼女の目には寛大で誠実な学者として写ったのであった。その後1849年に父が死に、遺産によりわずかながら一定の収入はあったが、一人だけで歩まねばならぬ道の開拓のために仕事を探していた Mary Ann に、John Chapman が Bray を通じて London における彼の仕事の helper としての地位を提供したのである。

Chapman は London の一流の知識階級にある人々の大多数と交友があり、毎週定期的に開いていた彼のパーティには常に多くの著名な文筆家や、イギリスはもとより他のヨーロッパ諸国やアメリカから来ている急進主義者たちが顔をそろえた。Chapman は Mary Ann より2つ歳下であったが6フィートを越える長身でさっそうとして、黒目がちのバイロンの美男子の部類に属する容姿の持主で女性関係もかなりはでであった。Marian が完成させた Straus の *Das Leben Jesue* の、三巻にもわたる翻訳本の出版を手がけたことで、Marian の語学力にまず注目した Chapman は、彼女が London に到着し Chapman の家に下宿した直後から、彼女の部屋で彼女を師に語学の勉強を始めている。当時 Chapman は14歳も年上の41歳の妻と2人の子供（3人目の子供はろうあで田舎の親叔にあずけられていた）、それに31歳の Elizabeth Tilly という家政婦兼彼の秘書的役割をしていた愛人と共に暮していたが、Chapman が Marian の部屋に足しげく通うようになると、彼の妻はもとよりさらにこの Tilly の嫉みを強く買い、Marian は3ヶ月後にはついに下宿していた彼の家を出て、実家に帰ることになる。Chapman は彼女を駅まで見送っていき、自分は彼女が好きなのだが家にいる二人の女性たちをもそれぞれに愛しているのだと告げると、Marian は悲しみの涙をあふれさせて泣いたと、Chapman は1851年3月24日の日記に記している。

しかし Marian と Chapman の関係はそれですっかり終わった訳ではなかった。Chapman はどんなに有用な人材を自分は手元から逃してしまったかに気づき始めた。折しも Chapman は季刊紙 *Westminster Review* を買い取る契約を結んだのである。*Westminster Review* は、かつては急進的な政治論および唯物主義哲学の重要な機関紙であって、1824年に Jeremy Bentham と James Mill によって社会の改革運動の推進という意図の下に *Edinburgh Review* と *Quarterly Review* の各紙に対抗して創刊されたものであり、最盛時には1620部の発行部数があったのに、Chapman がそれを買い取った時には1000部そこそこしか出ておらず、T. H. Huxley によって「最低の *Westminster*」とこき下されるありさまとなっていた。Chapman はこの *Review* を自由な議論の主要機関として再生させることを決意し、以前から知っていた Marian の持つ編集能力に着目して彼女の協力を仰いだのである。

ちょうど同じ頃、George Eliot の生涯における最も大切な伴侶となる George Henry Lewes も、盟友 Thornton Hunt (Lewes の妻 Agnes の恋の相手であり Lewes らと共に自由

恋愛主義を標榜していた)と共に革新的な週刊新聞 *Leader* を起し, *Review* も *Leader* も互いに事務所が近かったため, Marian は Chapman のところをしばしば訪れる Hunt や Lewes と知り合うようになるのである。

Marian は Chapman を主筆とする *Westminster Review* の副主筆となり, 編集とコラムの執筆に没頭していくのであるが, 彼女の編集能力は Chapman も目をみはるばかりであり, 彼女の鋭い批評眼と相まって *Review* の名声はたちまち回復されていったのである。このほとんど無報酬に近い編集者という地味な仕事を通じて彼女は時の指導的進歩主義者や自由思想家のすべてに出会うことになった。その中には John Stuart Mill, Harriet Martineau, Herbert Spencer, Thomas Henry Huxley や George Henry Lewes 等がおり, *Review* の編集者としてのこの3年の間彼女は London の文壇の中心にいたことになる。Henry James は1855年に彼女の手紙を読んだ時, 「このような考え方 (つまり信仰心の篤い田舎娘時代の手紙に見られる彼女の考え方) と, 中年に達して今やすべての文化がその前に全貌を表わし, 若い頃ならただ冒瀆と映ったであろう名声と富と活動とを矢継早に手に入れた女性の考え方との対照的違いには, どこか痛ましい影さえあった」と指摘している。

ともあれ彼女の下で *Review* 紙は隆盛を極めた。彼女は驚くべき如才なさをもって寄稿者を, そして Chapman 自身をさばいたのである。Chapman との恋愛に一応の区切りをつけた Marian は Chapman の家で *The Economist* の編集者であった Herbert Spencer に引き合わされる機会を得る。彼は Bray や Chapman などの彼女のかつての恋人達と同様にハンサムであり6フィート以上もあるほどの長身で, 知性にあふれた free-thinker であった。しかし Spencer は内省的であり, 余り感情を外に現わさず, 性の問題には極めて潔癖であるという点で Bray や Chapman とは異なっていた。Marian の関心はこの哲学者らしい冷静さと誠実さを持った Spencer にたちまち向けられていく。Marian が恋のとりこになった男性のうちで Spencer だけが独身であったということもあり, 観劇や音楽会を共に楽しみ親交が深まるにつれて, 彼女は彼との結婚を夢み確信も深めていったが, 当の Spencer は彼の「自叙伝」の中に見る限り Marian を特別視していたような記述はない。つまり彼は1851年に著した *Social Statics* の中で「衡平の原則適用というのは, 性の相違を全く認知しないことである」ということを公表し, また婦人の政治や文化の面における男性との等質性を唱道して, その思想にのって女性の自立を信奉する自由平等思想のゆるぎない支持者であったのである。つまり結婚への願望はなくはないようであったがおおむね独身主義者で, その冷静な哲学者としての精神とも相まって, 愛情深く常に一人の男性の強い影響下にあることを求めている Marian の, ますますエスカレートしていく彼への情熱に, Spencer は驚きもし恐れも感じたのであった。そして1852年の夏をもって彼らの恋は終るのである。

(次号に続く)

注

- (1) 上田女子短期大学紀要24号 2001年3月発刊
- (2) 自ら罪を犯したのではなかったが罪のぬれぎぬを着せられて故郷を追われ、悲惨な半世を過ごすことを余儀なくされた Silas Marner の人生に、過去、現在、未来の一貫性が個人にとっていかに大切なものであるかが表現されている。(Silas Marner by George Eliot. 1861年)
- (3) Herbert Spencer: (1820~1903) イギリスの哲学者、社会学者。進化論に基づいて社会の進化発展を説明、宇宙・生物・道徳・社会にわたる総合的・有機的進歩の法則を主張した。
- (4) 「ジョージ・エリオットの小説一分析と再評価」藤田清次 北星堂書店 P11
- (5) George Eliot の本名
- (6) George Eliot, *Woman of Contradictions*, 1989 George Weidenfeld & Nicolson Limited, England
- (7) *The Real Life of Mary Ann Evans, George Eliot, Her Letters and Fiction* by Rosemarie Bodenheimer 1994, by Cornell University Press
- (8) 上田女子短期大学紀要25号 2001年度発刊予定
- (9) Goethe ; ドイツの詩人、作家。「若きウェルテルの悩み」などでシュトルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)運動の旗手として活躍。10年間ワイマール公国で政務を担当。のちイタリア旅行の体験などを通じて、シラーと共にドイツ古典主義を完成。また自然科学の領域でも実績をあげた。戯曲「ファウスト」「エグモント」、叙事詩「ヘルマンとドロテア」、小説「ウィルヘルム・マイスター」、自伝「詩と真実」、自然科学論集「色彩論」など。
- (10) Owen ; イギリスの社会改革運動の先駆者。理想的社会の建設を構想、北アメリカに協同組合村を設けたが失敗。帰国後共同組合運動・労働運動に専心。空想的社会主義者の代表とされる。著「新社会観」「自叙伝」など。
- (11) Comte ; フランスの思想家。社会学の創始者とされる。人間の知識に神学的・形而上学的・実証的の三段階を認め、自然科学的実証主義による社会学体系を確立した。晩年は人間教という宗教を創始。著「実証精神論」「実証哲学講義」など。
- (12) Feuerbach ; ドイツの唯物論哲学者。ヘーゲル左派に属する。ヘーゲル哲学の神学的性格を批判し、個別的な自然物としての人間学を樹立した。また神の幻想からの解放を説き、マルクス・エンゲルスに大きな影響を与えた。著「キリスト教の本質」など。
- (13) Darwin ; イギリスの博物学者。測量船ビーグル号で南半球を周航して動植物・地質を調査し、また育種動植物の異変の観察などをもとに、自然選択説を提唱、生物進化を説明。生物学ばかりではなく社会思想にも大きな影響を与えた。著「種の起源」「ビーグル号航海記」など。
- (14) Marx ; ドイツの経済学者・哲学者・革命家。エンゲルスと共に科学的社会主義の創始者。ヘーゲルの観念的弁証法、フォイエルバッハの人間主義的唯物論を批判して弁証法的唯物論を形成。これを基礎にフランス社会主義思想の影響の下で古典派経済学を批判的に摂取、資本主義から社会主義へと至る歴史発展の法則を明らかにするマルクス主義を創唱。また終生革命家として国際共産主義運動に尽力した。
- (15) Spencer ; 注(3)参照
- (16) 「ジョージ・エリオット文学の倫理性」George Eliot and Her Morality 富士川和男著 榎大盛堂書房 1978年2月

*The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton* George Eliot の小説における gossip, rumor の働きについて(1)

- (17) Methodist ; プロテスタント教会の教派の一つ。1730年代にイギリスのウエスリーが起した英国教会の改革運動に始まり、監督制度と代議制度とを統合する。巡回説教者により開拓期のアメリカに広まる。
- (18) Dissenter ; 英国国教反対者, 非国教徒
- (19) *George Eliot and Her Morality*, 富士川和男著 P 7
- (20) 「ジョージ・エリオットの小説」 藤田清次著 P 8
- 話し合いをすると二人はすぐ感情に走ってしまうので、書面にて申し上げます。私は自分の確信するところを変えるわけには参りません。只今の家が、ただ、ろくな女にはなれそうもない娘の社交の中心として役立つに過ぎないのだから、こんな家なんかさっさとたたんでしまえとおっしゃるのでしたら、私としても…こんな家に住んでいてもちっとも楽しくはございません。いつなりと、お好きなように処分して下さい。お父さんのためになるのでしたら、私はどこでもと一緒に暮らしたいのですが、もしこんな娘なんか役に立つものかとお考えになるのでしたら、私の方で自発的に家を出ることなど少しも恐れてはおりません。心ならずも、お父さんに苦しみを与えてきたこの娘に対し、正当な罰を与えないことには腹の虫がおさまらぬとお考えになり、その罰の一つとして、私に分けて下さるつもりにしておられる財産を私から取り上げ、私よりももっと与えがえのある、ほかのお子さんにお与えになっても、私は不平などこぼす気は毛頭ございません。(『書簡集』第一巻129頁)
- (21) evangelical ; イエスの十字架上の死と復活を通してもたらされた人間の救いの教え。聖書の伝える福音に信仰の中心を置く立場。もっとも広義には、プロテスタンティズムのこと。
- (22) *The Real Life of Mary Ann Evans*, by Rosemarie Bodenheimer P 68
- (23) 同上 P 67
- (24) 高い理想に向かい、自らの向上心に燃える若き情熱を死にゆく父親の看病に浪費せざるを得なかった苦しみは *Mill on the Floss* の Maggie の人生に適確に表現されている。
- (25) 「アダム・ビード」阿波保喬訳 開文社出版株式会社, 1979年7月
- (26) *George Eliot and Her Morality*. P 17
- (27) 「ジョージ・エリオット」 by Rosemary Ashton, 前田絢子訳 P 11 雄松堂出版 1988年9月
- (28) Strauss ; 1808-1874 ドイツの神学者・哲学者。ヘーゲル左派に属し、福音書における超合理的要素の歴史性を否定する「イエス伝」を著すなど、革命的な神学批判を行なった。
- (29) 「ジョージ・エリオット」 by Rosemary Ashton, 前田絢子訳 P 6
- (30) John Stuart Mill ; 1806-1873 イギリスの経済学者・哲学者。ベンサム功利主義と、リカードの経済学の普及に努めた。イギリス古典学派の経済学者 James Mill (1773-1836) の長男。父の功利主義思想と古典学派経済学を継承。前者の基礎である経験論から帰納法の論理を完成して社会科学に貢献。経済学については社会主義思想の高まりの中で改良主義の立場からリカード分配法則を中心に修正を施した。著「経済学原理」「自由論」「論理学大系」
- (31) Harriet Martineau ; 1802-76 英国の女流小説家・経済学者。
- (32) Thomas Henry Huxley ; 1825-1895 イギリスの動物学者。海産動物、特にクラゲの研究のほか、高等動物の内・外胚葉の研究を行う。Cダーウンの友人で、進化論を支持し、その普及につとめ、人間の動物起源を初めて明言して論争をひきおこした。著「自然界における人間の位置」
- (33) Henry James ; 1843-1916 アメリカ生まれのイギリスの小説家。英米心理主義小説の先駆者。代表作「ある婦人の肖像」「ねじの回転」
- (34) 「ジョージ・エリオット」 前田絢子訳 P 10

(35) 同上

(36) *George Eliot, Woman of Contradictions.* P112

※ (著名人の解説については「大辞林」,三省堂,1990年3月, *Shogakukan Random House*, 1979年, *Kenkyusha's New English-Japanese Dictionary*, 1953年に依拠している。)